

半年程度の研究活動でも、研究計画がきちんと立てられていればまとまった成果が上げられること、また、遠隔でも卒業研究を十分プレゼンテーションできるという感触を持った。一方、音声流れなかったり、パワーポイントの画面が固まったり、録画のスタートボタンの押し忘れなど小さな運営上のトラブルは時々起こっていた。あたふたする教員を尻目に、座長を務める大学院生が冷静に対処していたのが印象的であった。

3月20日には学位記交付式を交流センターで実施し、72名の卒業生を送り出した。卒業生では、東出真帆さん（成績優秀者）、中澤利恵さん（日本農芸化学会での発表がトピックス演題に選定）、徳田龍司くん（湖風会学生表彰、ウィンドサーフィン部の活動で模範的な成果）の3名が学生表彰を受けた。東出さんは、謝辞総代者として、自ら作文した謝辞を廣川能嗣学長に届ける役割を果たした。また、3回生の中森麻由さんと船原瑞穂さんが代表・副代表を務める近江楽座ボランティアサークルHarmonyが、「障害者の生涯学習支援活動」に係る文部科学大臣表彰を受賞した。

研究活動には制限のある条件下であったが、上町達也准教授らの共同研究グループが、伊豆諸島の青ヶ島に由来するガクアジサイのゲノムの解読(<https://www.usp.ac.jp/topics2/hydrangea/>)、杉浦省三教授が、「魚食文化復活の鍵を握る『骨なし魚』の養殖」で第5回滋賀テックグランプリ最終選考会パートナー企業賞を受賞(<https://www.usp.ac.jp/topics2/x201/>)という成果を上げられ、大学ホームページのNews&Topicsに掲載された。

このほかの特記事項としては、特別選抜の推薦入試 Aでは本年度の入試から総合問題の出題をやめて共通テストを導入したことが上げられる。志望動向にどのように影響するのか今後注視する必要がある。3年次編入学試験も実施し、1名が合格した。

2月には、卒論・修論・博論の著者名と論文タイトルを公開するかどうかで学部内で議論があった。ひとまず今年度は、学生に同意書を作

成させたうえで、環境科学部年報に氏名と題目を掲載することになった。仮に論文タイトルが全面的に不開示になった場合、研究活動を対外的に示すものとして、学会発表や投稿論文の記録がこれまでより重要となる。学部・学科の運営にも大きく影響を与えられとされる。本学での学びにより成し遂げた卒業研究が、「公開されると本人に不利益を及ぼす個人情報」とならず、学生たちが誇りを持って本学を巣立てるように、教員としても一層の努力が必要だと感じた。

最後に、この一年間、学科の先生方のご支援に感謝するとともに、少しでも早く事態が収束し、研究・教育活動が以前の通り実施できることを願って筆をおきたい。

## 環境動態学専攻のこの一年

丸尾 雅啓  
環境動態学専攻長

2020年度の在學生は博士前期課程29名、後期課程11名であった。博士前期課程を7名が修了、博士後期課程では9月に銭軍氏が学位論文“Techniques for mass-culturing microalgae using anaerobic digestion effluent from over-growing and invasive aquatic macrophytes”により博士号（環境科学）を取得した（詳細は本年報の抄録をお読みください）。またうれしいことに日本学術振興会特別研究員(DC1)として久岡知輝君が、昨年度の森井清仁君に続いて新たに採用された。

大学院生の活躍としては、西平幸生君（2019年3月修了）の研究によってコイに寄生するフタゴムシとフナ類に寄生するものが別種であることが突き止められ、その形態や遺伝的な違いが明らかにされた。このうちコイに寄生するものを*Eudiplozoon kamegaii* Nishihira et Urabe, 2020（和名：コイフタゴムシ）と命名し、滋賀県草津市を模式産地として新種記載、今年度に査読付論文として掲載された。

教員の研究としては上町達也准教授の所属する共同研究グループが、伊豆諸島の青ヶ島に由

来するガクアジサイのゲノム解析を行い、ミズキ目のなかで初めて全ゲノムを解読した。また丸尾らの共同研究グループ（名古屋大学・角皆潤教授ら）が琵琶湖の謎のメタン濃集水塊の形成メカニズムを解明し、夏季に亜表層に濃集していたメタンの大部分は、沿岸域に広がる堆積物中で生成されたものであることを明らかにした。また杉浦省三教授が第5回滋賀テックグランプリ最終選考会で「The養殖革命」「魚食文化復活の鍵を握る『骨なし魚』の養殖」についてプレゼンテーションを行い、パートナー企業賞を受賞した。

今年度は昨年度末から続く新型コロナウイルス：COVID-19感染症の蔓延によってさまざまな活動に制約があり、野外での研究活動をもっぱら行う本専攻の大学院生にとっては大きな痛手であったことは否めない。その中でも個々が自分の可能な範囲で研究活動を進め、修了を予定していた学生全員が無事に修士論文を提出できたことが何よりであった。留学生についても、入国の許可がなかなか下りずに苦労した研究生もあり、世界の現在の状況が研究活動に大きな制約を与えていることは間違いない。一方でそれを超えていこうとする様々な工夫もされており、見方を変えるといい意味での変化を起こすきっかけにもなったかもしれない。

大学院入試についても受験者の安全確保、感染の可能性のある受験生がいた場合の対応についての議論がなされた。結果として9月、2月の試験共に受験不可・追試希望となった学生はおらず、予定通り試験を実施できたことは幸いであった。次年度以降は試験科目のうち英語についてはTOEICスコアを採用することになり、今まで以上に英語力を公平にはかることができると期待される。

変化というと、環境科学部の実習調査船として25年間、琵琶湖観測に活躍してきた「はっさか」が新船の建造に伴い、この3月で引退となった。環境科学研究科・環境科学部の実験実習・研究調査だけでなく、工学部（水中微生物探査）、人間文化学部（湖底遺跡の探索）などにも利用いただいて成果を上げてきた。この4月

からは一回り大きくなった「はっさかII」が代わって就航する。「はっさか」で培われたノウハウと、改善点が盛り込まれており、これからの実習・調査での利用が今から楽しみである。

## 環境計画学専攻のこの一年

白井 宏昌

環境計画学専攻長

2020年度は、滋賀県立大学学位規程および大学院学則に基づき、論文提出によって1名（環境意匠研究部門）に博士（環境科学）の学位が授与された。また、環境意匠研究部門では12名、地域環境経営研究部門では3名の学生が博士前期課程を修了し、修士（環境科学）の学位を授与された。

環境意匠研究部門では修士論文、修士設計のいずれかを選択するが、本年度は修士設計6名、修士論文6名の提出があった。新型コロナウイルスの感染が続いた状況での研究、特に海外の建築・都市を対象にした研究は、渡航制限もあり研究の遂行は困難を極めたと思うが、そのなかでも例年同様、綿密な調査・分析に基づいた研究・設計へと纏めていったことは特筆すべきであろう。最終研究発表会では、発表者の多様なテーマに対して質疑応答や批評が行われ、2点の修士設計と1点の修士論文に優秀賞が贈られることとなった。

地域環境経営研究部門では、修了した学生のうちそれぞれ1名が、資源・環境経済領域、環境政策、環境システムの領域で、修士論文を提出した。最終研究発表会は、新型コロナウイルス感染予防の観点から、オンラインで開催され、発表及び活発な質疑が行われた。

なお、環境意匠研究部門の在籍学生数は、博士前期課程29名（M1：17名、M2：12名）、博士後期課程1名（ともに2021年3月31日時点、休学学生含まず）、地域環境経営研究部門の在籍学生数は、博士前期課程6名（M1：6名）、博士後期課程1名であった（ともに2021年3月31日時点、休学学生含まず）。